

『ソナタ・アルバム』に関する一考察

島 畑 齊*

Hitoshi SHIMAHATA

Eine Betrachtung über *Sonaten-Album*

1. はじめに

『ソナタ・アルバム』は、Adolf Ruthardt, Louis Köhler の編集・校訂によって、ペータース社から出版されたピアノ曲集である。わが国においても、それと同一内容の楽譜が出版されており、長い間古典ソナタの入門用として広く親しまれてきた。この曲集には、J. Haydn, W. A. Mozart, および L. v. Beethoven のソナタから26曲の作品が選り集められている。それらの作品は、一般に『ソナチネ・アルバム』終了程度の学習者のための、ソナタ形式の理解と基礎的技術（音楽的理解を伴う）の修得を目的とした教材として重要な位置を占めている。

このように、『ソナタ・アルバム』は、ピアノ教育における基本的な教材であるにもかかわらず、一方においては、次のような問題点も認められる。すなわち、ペータース版は、初版以来現在に至るまで改訂されていないために、近年出版された原典版との間に、記譜上の大きな隔たりが生じていることである。周知の通り、原典版は、綿密な資料準備とその批判を基礎として、作曲家の創作上の意図を最大限に再現しようとするものである。したがって、原典版を用いるのが良いことは言うまでもない。しかし、作品の時代様式や記譜上の慣習等の知識が要求されるために、初級学習者にとっては十分に使いこなせないという問題が生じる。そこで、ペータース版の選曲を尊重しながらも、実用性と原典版の重要性を考慮した2種類の『ソナタ・アルバム』が、最近相次いで出版された。それらは、わが国のK社とS社の『ソナタ・アルバム』である。

本稿においては、ペータース版に依拠している楽譜が一般に通用していることから、ペータース版の楽譜上の問題点を指摘し、さらに、新しく出版されたK版とS版

におけるそれらの取り扱いについて検討した。ただし、全作品について考察するのではなく、第1巻に収められている Haydn の作品5曲に焦点を絞った。それは次のような理由による。

- 1) K版の第2巻が未出版であること。
- 2) 第1巻の学習は、第2巻に比べて早い時期に行われる。この初期学習において、より信頼できる楽譜を用いる習慣が学習者に要求されること。
- 3) 一般に、Mozart や Beethoven に比べて、Haydn のソナタに対する認識が浅いこと。

なお、これら5曲の自筆譜は現存していない。本稿では、2社の原典版、G. Henle 社：*Haydn, Sämtliche Klaviersonaten* と Universal Edition（国内では音楽之友社）：*Wiener Urtext Edition; Haydn, Sämtliche Klaviersonaten* を参照しながら検討を進めた。

2. 第1番（Hob. XVI : 35）について

第 I 楽章

冒頭の第1主題の呈示とその確保において（T.¹ 1-16）、K版は、*fx* 以外の強弱記号を示していないために、学習者の戸惑いが予想される。ここには、何らかの強弱記号を求めたい。ペータース版（以下P版という）とS版は、冒頭において *P* を表示しているが、*Allegro con brio* の性格から、ウィーン原典版（以下WUという）のように、*f* で奏したい。そうすることによって、T.45以下における *pp* のしなやかな第2主題と明確な対比をつくることができるであろう。

T.20-31, T.36-40, T.63-65, T.120-121, T.126-130, T.161-167においては、ヘンレ版（以下HUという）とWUは、装飾音記号にターンを用いている。しかし、P版は、ターンを逆にした形の記号を用いている。この記号は、C. P. E. Bach の指摘する「3

* 島根大学教育学部音楽研究室

音シュライファー」²⁾であり、下隣接音—主要音—上隣接音—主要音の順に奏するものである。つまり T. 20の d^2 音に付けられた「3音シュライファー」は、譜例 1a のように、 $c^2-d^2-e^2-d^2$ 音を奏することになる。しかし、P版の脚註における指示は、譜例 1b のように $d^2-e^2-d^2-c^2-d^2$ 音とされ、記号と明らかに矛盾が生じている。このように、P版は、この楽章以外においても、ターンを逆ターン記号に置き換えているために、注意が必要である。なお、P版の内容に従っているわが国のZ版では、以前の楽譜は、P版と同様に逆ターン記号を示していたが、現在ではすべて正しいターン記号に改めている。

譜例 1



T. 59, 61, および149の第4拍目のトリラーに、P版とS版は後打音を付けているが、これらはHUとWUでは見受けられない。S版は原典版に従って後打音を示していない。Heinrich Schenkerも指摘しているように³⁾、一般に、HaydnやMozartの作品ではトリラーの後打音が記されていないために、それを奏するかどうかの判断は、その箇所状況と演奏者の趣味によって決定される。

T. 113の上声、第4拍目を、P版は $c^2-d^2-es^2-f^2$ 音としているが、HUとWUによると、これは $c^2-d^2-e^2-f^2$ 音である。S版は、原典版に従っているが、K版は $c^2-d^2-es^2-f^2$ 音のまま改めてはいない。

T. 160においては、P版は、第4拍目から *f* としているが、HU、WUによると、下声部は、第1拍目から *f* で奏されなければならない。同様に、T. 164の下声・第1拍目にも、P版では *P* の脱落が見受けられる。S版の両箇所は、原典版に従って正しく記されているが、K版のT. 164は、P版と同様に *P* の脱落が見受けられる。

第 II 楽章

冒頭とT. 22において、K版は、原典版と同様に強弱記号を示していないが、学習者に対する配慮から必要ではないだろうか。なお、P版とS版には *mf* が示されている。

T. 1 上声の第1拍目・後半を、HU、WU、およびS版は、前打音を譜例 2a のように示しているが、P版と

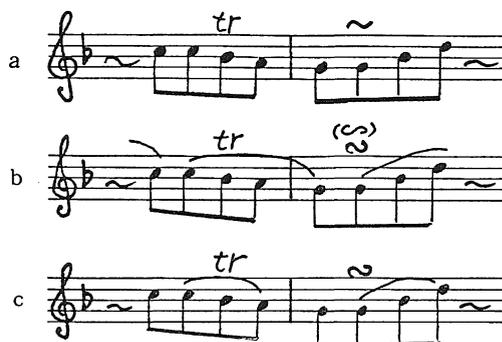
K版は、譜例 2b のように、奏法を楽譜に組み入れている。このような箇所は、T. 2, 3, 5, 6, 10等にも見受けられる。

譜例 2



T. 3 の後半からT. 4の後半では、HUとWUは、譜例 3a のように、8分音符の音列に対してアーティキュレーションを示していない。P版では、校訂者によって譜例 3b のようなスラーが付けられ、また、S版においても譜例 3c のようなスラーが細線で示されている。この両者の書法は異なるが、奏法に関しては同じ意味として解釈できる。一方K版は、校訂者によるアーティキュレーションの補足を示していない。学習者に対する配慮から、校訂者の指示を求めたい。

譜例 3



T. 4 の上声、第1拍目 g^1 音に付けられた装飾音は、P版では逆ターン記号であるが、正しくはターンでなければならない。このターンの奏法を、P版とK版は、主要音から開始するスナップターン式としている。しかし、基本的なターン奏法として、上隣接音から開始する方がよい。

T. 6では、K版とS版は、原典版に従って下声の第2拍目F音にスタッカートをつけているが、P版は、何も示していない。

T. 14の上声、第2拍目 fis^2 および f^2 音に付けられている装飾音は、P版ではトリラーである。しかし、HUとWUによると、これらは半モルデント (Halbmordent)⁴⁾ であり、K版とS版もこの記号を用いている。この奏法は、Christa Landonによると⁵⁾、ターン

式あるいはモルデント式のいずれかである。S版は、脚註においてターンとしての奏法を指示している。一方、K版には指示が見受けられない。しかし、指使い——3→4——から判断すると、校訂者はP版のようなトリラーの奏法を指示しているように思える。もしターンあるいはモルデントとして奏するならば、指使いは、第3指から第2指としなければならない。学習者は、注意が必要である。なお、T.35においても同様の問題が見受けられる。

T.17の第2拍目に示されている装飾音は、P版ではターン記号である。しかし、HUとWUによると、これは半モルデントであり、K版とS版も原典版に従っている。奏法は、その前の音と同音反復となっているために、ターンとして奏するのがよいだろう。なお、T.29とT.38においても同様の問題が見受けられる。

第 III 楽章

T.29の中声、第1拍目では、HU、WU、K版、およびS版は、括弧付きで d^2 音を示しているのに対し、P版は音符を示していない。この箇所は、T.4、21等と関連があるため、 d^2 音を奏するべきである。

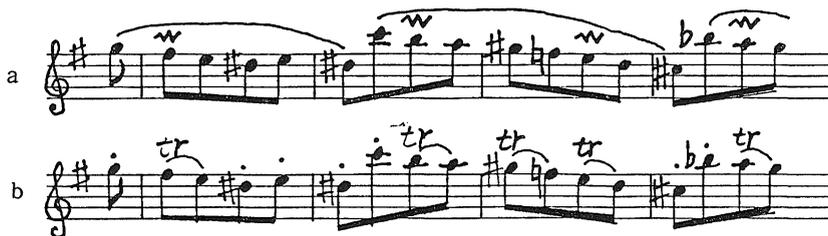
T.37上声の最後の音符は、P版では d^2 音であるが、HU、WUによると c^2 音である。K版とS版は、原典版に従って c^2 音としている。また、T.58の上声、第2拍目の8分音符は、P版では f^2 音であるが、HU、WU、K版、およびS版では es^2 音である。なお、P版に従っているZ版は、これら2箇所音符について、原典版の音を脚註で指摘しており、その姿勢は評価できる。しかし、第2番以降のソナタにおいて現れる同様の問題については、全く触れていない。

T.74では、S版は、HUに従って下声の第3拍目に

譜例 4



譜例 5



休符を置いている。しかし、ここはT.6、51と同型のため、4分音符の $e \cdot c^1$ 音を奏してもよいだろう。

3. 第2番 (Hob. XVI : 27) について

第 I 楽章

3種類の『ソナタ・アルバム』を比較して、気が付くことは、K版では校訂者によるアーティキュレーションの補足が示されていない点である。この版に示されているのは、作曲者の記号のみである。たとえば、K版のT.58、59は、HUやWUと同様に、譜例4のように表示されている。一般に、テンポの速い古典楽曲における跳躍進行は、ノン・レガートまたはスタッカートで奏される。この慣習を理解している学習者は、P版やS版のように、スタッカートで奏するであろう。しかし、『ソナチネ・アルバム』終了程度の学習者に、それを期待するのは無理であろう。したがって、ここにはS版のような実用性を考慮したアーティキュレーション記号を望みたい。

T.1では、K版は、ターンを g^1 音と h^1 音のそれぞれの音符上に示しており、Z版にも同様の問題が見受けられる。しかし、HUとWUによると、このターンは g^1 音と a^1 音の間、および h^1 音と c^2 音の間に示されており、P版とS版もこの記譜に従っている。ただし、P版の記号は、誤って逆ターン記号となっている。

T.2、4、7、27等における下声の8分音符を、P版はスラーで結んでいるが、これらの8分音符をスタッカートで奏することによって、この楽章のもつ活発な性格を表現することも考えられる。

原典版やS版のT.3、26等に示される小音符の前打音は、P版とK版では、楽譜の中に実音符で記されている。

T.8の下声を、P版は8分音符の g^1-d^1-g 音としている。しかし、HU、WUによると、これは4分音符の g^1 音であり、K版とS版もこの記譜に従っている。

T.21では、HU、WU、K版、およびS版は、第1拍

目の上声 h^2 音に前打音 g^2 音を付けているが、P版では、この前打音は示されていない。

T.22の上声では、P版は、 $d^2-c^2-h^1$ の3音にわたってスラーを付けている。しかし、HU, WU, K版、およびS版は、スラーを d^2-c^2 の2音だけに示している。

T.72-75の上声では、HU と WU は、アーティキュレーションを示していない。P版は、譜例 5a のように、スラーを付けているが、S版にみられる譜例 5b のようなアーティキュレーションにすることによって、はつらつとした性格を表現することができるであろう。なおK版は、この箇所でもアーティキュレーションを全く示していない。

T.74の上声 gis^2 音に、P版はトリラーを示していない。

T.83の上声、第2拍目の最後の音符を、P版は a^2 音としているが、HU, WU, K版、およびS版は g^2 音としている。また、T.103の上声、第1拍目を、P版は $d^2-c^2-h^1-c^2$ 音としているが、原典版や他の版では $d^2-c^2-h^1-a^1$ 音である。

第 II 楽章

この楽章の冒頭では、P版は f を示している。しかし、第 I 楽章 (*Allegro con brio*) の冒頭 mf と比べると、ここの f は強すぎるように思われる。S版のように、 mf が適当であろう。なお、K版は、この箇所に強弱記号を示していない。

T.1, 5, 15, 25の第1拍目 d^2 音には、P版はターンを付けている。しかし、HU と WU によると、この記号は半モルデントであり、K版とS版もこの半モルデントを用いている。

T.16の第3拍目、およびT.18の第2拍目に示されている装飾音を、P版はターンとしている。しかし、この記号は、HU と WU によるとトリラーであり、K版とS版も原典版の記譜に従っている。

T.21-22の上声を、K版とP版は譜例 6a のようにしている。これは、HU や WU でみられる前打音(譜

譜例 6



例 6b) を、楽譜の中へ実音符で示しているのである。また、K版とP版の T.21に示されている装飾音はターンであるが、原典版ではトリラーである。さらに、原典版のT.22の d^2 音に付けられているトリラーは、K版とP版では示されていない。なお、これらの記号に関して、S版はすべて原典版の記譜に従っている。

T.24の第3拍目 fis^1 音に、HU, WU, K版、およびS版はトリラーを付けている。しかし、P版ではこのトリラーは示されていない。

T.41の第3拍目 fis^1 音に、P版は、トリラーとその後打音を付けている。しかし、原典版や他の版では、これらの記号は示されていない。

T.56の上声、第1拍目 es^2 音に付けられた装飾音は、K版とP版ではターンであるが、HU と WU によると、これはトリラーであり、S版も原典版の記譜に従っている。

T.66の上声を、K版とP版は譜例 7a のようにしているが、本来の形は、譜例 7b のように、主音符 g^1 のあとに休符が置かれている。このような場合の奏法について、C. P. E. Bach⁶⁾ や J. J. Quantz⁷⁾ は、次のように指摘している。すなわち、前打音の長さは主音符の全時価をとり、さらに、主音符の長さは休符の時価をとって奏される。この奏法をT.66に適用すると、譜例 7c となる。S版とWU は、脚註において、この慣習的奏法を示しているのに対して、K版は、この点について全く触れていない。

譜例 7



第 III 楽章

HU と WU によると、Haydn は、譜例 8a のように曲の冒頭にはアーティキュレーションを示していない。このことと同じ形のT.73以降では、譜例 8b のようなスラーを示している。K版の両箇所は、原典版に従っている。S版は、T.73以降と同様のスラーを冒頭にも用い

譜例 8

ている。P版の両箇所は、譜例 8c のようなスラーを示しているが、このアーティキュレーションは、Haydn によるものとは異なっている。このように、さまざまな記譜が楽譜間にみられるが、これらのほかに、冒頭を譜例 8d のようなスタッカートで奏することもできるであろう。そうすることによって、T.73以降のしなやかな表情との対比をつくることができる。

T.4, 20, 116の第2拍目G音、およびT.88の第2拍目d音を、HUとS版は、8分音符ではなく4分音符

譜例 9

譜例10

としている。しかし、これらと関連するT.28, 44, 76, 80等では8分音符であること、この楽章は8分音符のAuftaktから開始することなどから、8分音符で奏することもできる。

T.8の上声d²音に付けられた装飾音を、P版はモルデントとしているが、K版とS版は、HUやWUのように半モルデントとしている。奏法は、ターン、モルデントいずれでも可能である。

T.15-16, およびT.39-40を、P版は譜例 9a のように、また、K版とS版はHUやWUに従って譜例 9b のようにしている。P版には、中声部の4分音符g¹音とタイが欠けている。

T.43の上声は、P版ではc²-e²-d²-c²の4音にわたってスラーが付けられている。一方、S版とK版は、HUやWUに従ってe²-d²-c¹の3音だけにスラーを示している。

T.83の上声を、P版はa¹-c²-es²-a¹・c²音としている。しかし、HUとWUによると、これはfis¹-a¹-es²-d²音であり、K版とS版もこの記譜を用いている。

T.115上声の最後の8分音符を、P版はd²音としている。しかし、原典版やその他の版では、これはc²音である。

T.143の上声、第1拍目を、P版はg²-e²-d²-c²音としている。しかし、原典版や他の版ではg²-fis²-e²-d²音である。

4. 第3番 (Hob. XVI : 37) について

第 I 楽章

T.35-36, T.98-99に示される装飾音を、P版はトリラーとしている。しかし、HUとWUによると、これは半モルデントであり、K版とS版も原典版に従っている。奏法は、一般にモルデントが下行2度進行の中ではあまり使われないことから、ターンとして奏するのがよいだろう。S版は、脚註でターンの奏法を指示している。一方、K版は、奏法については触れていない。

T.46の中声、第3拍目e²音からT.47の中声、第1拍目e²音を、K版とP版は、譜例10のようにタイで結んでいるが、このタイは、HUとS版では示されてい

ない。また、WU ではこのタイに括弧が付けられている。T.46-49 での中声部の進行は同形反復を示しており、さらに、×印を付けた中声部の音は掛留音となっている。したがって、e² 音にはタイを付けて奏するのがよい。

T.59の上声、第3拍目 e² 音には、HU、WU、K版およびS版はトリラーを付けているが、この記号はP版では示されていない。

第 II 楽章

この冒頭に、K版は強弱記号を示していない。T.1のテナー声部・第3拍目 a 音から次の小節の a 音を、K版と WU はタイで結んでいる。このタイは、HU、P版、およびS版には示されていない。しかし、T.2の a 音は掛留音であるため、タイで奏してもよい。

第 III 楽章

P版は、曲の冒頭に、発想標語 “innocentemente” を示していない。

T.12の下声を、K版とP版は、a 音と a¹ 音のオク

譜例11

譜例12

譜例13

ターブとしている。しかし、HU と WU によると、この下声は a¹ 音だけであり、S版もこの記譜に従っている。

5. 第4番 (Hob. XVI : 36) について

第 I 楽章

T.2, 3, 4 の上声に示されている装飾音を、P版はターン（ただし、誤って逆ターン記号）としている。しかし、これらの記号は、HU と WU によると半モルデントであり、K版とS版も原典版に従っている。奏法については、この半モルデントが前の音を反復する音符上に位置していることから、ターンとして奏するのがよい。なお、P版は、これらの箇所以外に（T.17-19, T.38-40, T.45-47等）、半モルデントの代わりにターン記号を用いている。

T.9の第1拍目に、HU、WU、K版、およびS版は、fz を示している。しかし、P版では、この記号は示されていない。

T.10の上声 h¹ 音から T.11の上声 h¹ 音を、P版はタイで結んでいるが、このタイと T.11の h¹ 音は、HU、WU、K版、S版では示されていない。また、T.22の e¹ 音やT.41の a¹ 音においても、P版はタイを付けているが、これらも、HU をはじめ他の版では示されていない。

T.43の上声を、P版は譜例 11a のように cis-moll の属七の和音としている。しかし、原典版だけではなく、旧ハイドン全集の⁸⁾リプリント版である『Lea Pocket Score : ハイドン・ソナタ集』においても、この箇所には示されているのは、譜例 11b のような V度の和音である。

T.51-54の下声を、P版は譜例 12a のようなアーティキュレーションにしている。しかし、HU と WU によると、譜例 12b のように示されており、K版とS版もこれに従っている。

T.80の第1拍目 cis² 音に付けられた装飾音を、HU、WU、S版は、括弧付きの半モルデントとしている。こ

の記号は、K版とP版には示されていない。

この楽章の最後の部分（T.95-97）と呈示部の最後の部分（T.31-33）を比較してみると、P版は、両部分を符点のリズムで統一している。しかし、HUとWUは、譜例13のように、T.95以降には符点のリズムを用いていない。S版は、記譜上は原典版に従っているが、解説の中では、作曲者の責によるこのような差異を指摘し、両部分を符点のリズムで統一する奏法について触れている。K版もまた、記譜上は原典版に従っている。しかし、S版が指摘した点については、全く触れていない。

第 II 楽章

T.10やT.69以降に示されている前打音の奏法を、K版とP版は、実音で楽譜の中に表示している。

T.19の上声・第1拍目 c²音に付けられたターンの奏法を、P版は、c²-d²-c²-h¹-c²音としているが、基本的なターン奏法として、上隣接音から d²-c²-h¹-c²音と奏するのがよい。

T.29の下声、第2拍目を、K版とP版は e・a・c¹の和音にしている。しかし、この和音の中のa音は、HUとWUでは示されていない。S版も原典版に従ってa音を示していない。

T.40-41の中声部 e¹音を、P版はタイで結んでいる。しかし、HU、WU、K版、およびS版では、このタイは示されていない。また、T.41の中声部の最後の8分音符を、P版は a¹音としているが、HU、WUによると、この音符は dis¹音である。

T.87の上声、第2拍目 d²音に、P版はトリラーを付けており、また、HUとS版も括弧付きでトリラーを示している。一方、WUとK版はこのトリラーを示していない。ことと同型の T.3, 33, 67の d²音を見ると、WUやK版にもトリラーが付けられているため、演奏ではトリラーを奏するのがよい。

第 III 楽章

T.7およびT.30の上声 fis²音に付けられた装飾音を、P版はモルデントとしているが、HU、WU、K版、S版では半モルデントである。この半モルデントは、cis²-fis²-gis²音の上行形の中に位置しているため、ターン、モルデントどちらの奏法も可能である。S版は、脚註で両奏法を示しているが、K版は、奏法について触れていない。

T.22の上声、第1拍目 dis²音に付けられた装飾音を、P版はトリラーとしているが、HU、WU、K版、

S版では半モルデントである。この場合も、上行音型の中に位置しているため、ターン、モルデントどちらの奏法も可能である。S版の奏法は、指使い3-2-1-2からターンとしてであり、また、K版の奏法も、前後の指使いの関連でターンが推察できる。

T.35の上声 fis¹音に、K版はトリラーとその後打音を示している。しかし、脚註の奏法指示においては、この後打音は示されていないため、楽譜との間に矛盾が生じている。なお、この後打音は、HU、WU、およびS版では示されていない。

T.44のターンを、P版は譜例14aのように h¹音上に示しているが、HUとWUは譜例14bのように gis¹音と h¹音の間に示している。つまり、このターンは、gis¹音を装飾するものであり、h¹音に対する装飾ではない。S版は、原典版に従ってターンを2音間に置いているが、K版は、P版のように h¹音上に示している。

譜例14



6. 第5番 (Hob. XVI : 34) について

第 I 楽章

T.4の下声 c-e-g音に、P版はスタッカートをつけているが、HU、WU、K版、S版は、これらの音符にスラーを示している。

T.6とT.7の中声部、第4拍目では、P版は4分音符 dis¹音を示しているが、K版は、HUに従って、この dis¹音を示していない。一方、S版は、WUと同様に dis¹音を8分音符とし、括弧を付けて示している。このような相異は、S版の解説で指摘されているように、dis¹音を省略した場合、バス声部の進行 ais-hと中声部の進行 e¹-fis¹との間に平行5度が生じることになる。また、和音の第3音であるこの dis¹音が欠けることによって、空虚な響きとなる。したがって、これらの問題を避けるために、dis¹音を奏するべきである。ただし、WUのように8分音符として奏するものであり、P版のような4分音符であってはならない。

T.8の上声、第3拍目 g¹音上に、WUはトリラーを、また、HU、K版、S版は括弧付きのトリラーを示している。しかし、P版では、このトリラーは示されていない。

T.22-24の上声 c³音、T.87-89の上声 a²音に、

K版とS版は、HU に従って括弧付きのターンを、また、WU は、校訂者の資料解釈の相異⁹⁾から、トリラーと括弧付きのモルデントを示している。しかし、P版のこれらの音符には、装飾音は示されていない。

T.33の中声部・第1拍目の音符を、P版は e^2 音としている。しかし、HU と WU によると、この音符は es^2 音であり、旧ハイドン全集のリプリント版、*Lea Pocket Score* においても、 es^2 音となっている。K版とS版は、原典版に従って es^2 音を示している。

T.39-40の中声部 h^1 音を結ぶタイは、P版では示されていない。

T.82の下声を、P版は、譜例 15a のように e - $moll$ の属七の和音としている。しかし、この和音は、HU と WU では譜例 15b のような減七の和音であり、K版とS版もこの記譜に従っている。

T.90の下声の音型を、P版は譜例 16a のようにして

譜例15



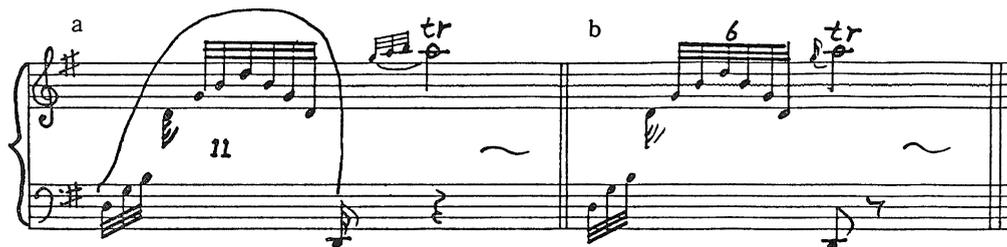
譜例16



譜例17



譜例18



いるが、これは、HU と WU によると譜例 16b であり、K版とS版もこの記譜に従っている。

T.91のバス音を、P版は cis^1 音としているが、HU WU, K版, およびS版では c^1 音である。

T.97の中声部・第1拍目 e^2 音を、P版は8分音符としているが、HU と WU では4分音符である。S版は、原典版の記譜に従って4分音符としているが、一方、K版は、P版のような8分音符としている。

T.110, 118, 119の上声・最初の音を、P版は e^2 音としている。しかし、HU と WU によると、この音は g^2 音であり、K版とS版もこの記譜に従っている。また、T.113の同様の箇所を、P版は c^3 音としているが、 e^3 音の誤りである。

T.111の下声、第3拍目と第6拍目の音を、P版は、両箇所ともに g^1 音としている。しかし、HU と WU によると、第3拍目は e^1 音、第6拍目は d^1 音であり、K版とS版もこの記譜に従っている。

T.122の下声、第1拍目の4分音符を、P版は $e \cdot e^1$ 音のユニゾンにしている。しかし、HU と WU によると、この音は、 $E \cdot e$ 音としてオクターブ低い位置に示されており、K版とS版もこの記譜に従っている。

T.127の最後の音符 $e^2 \cdot e^3$ 音を、P版は4分音符としている。しかし、HU, WU, K版, およびS版では8分音符である。

第 II 楽章

T.12の上声では、P版は、 $a^2-gis^2-gis^2-g^2$ の4音にわたってスラーを付けている。しかし、HU, WU, K版, S版は、このスラーを示していない。スタッカートが、2つの gis^2 音上に示されている。また、下声では、P版とK版は、第3拍目のバス音を e^1 音としているが、HU, WU, S版は、 d^1 音としている。

T.21-22の下声では、P版は、譜例 17a のようにT.22に h 音を記譜して、T.21の h 音とタイで結んでいる。一方、HU, WU, K版, およびS版は、譜例17bのようにT.22の h 音とタイを示していない。しかも、

T.22のバス音 e を 4 分音符としている。

T.25, 第 2 拍目の最後の音を, P 版は e^3 音としている。しかし, HU と WU は c^3 音とし, K 版と S 版もこの記譜に従っている。

T.29-30の下声を, P 版は fis^1-e^1-A の音型としている。しかし, HU は $fis^1-e^1-d^1$ 音とし, K 版と S 版がこの記譜に従っている。また, WU は, 校訂者の資料解釈の相異¹⁰⁾によって, fis^1-G-A 音としている。

T.44では, P 版は, 譜例 18a のように, 第 1 拍目を D 音まで含めて, 11 連符としている。また, 第 2 拍目 a^2 音の前には, $g^2-a^2-h^2$ の滑走音が付けられている。しかし, HU と WU によると, 譜例 18b のように, 第 1 拍目は D 音を含まず, 4 個と 6 個の音型に分けられる。さらに, a^2 音の前には前打音 g^2 が示されている。この前打音は, D 音と同時に奏されなければならない。

T.46の下声, 第 2 拍目を, P 版は dis 音のみを示している。しかし, HU と WU によると, この箇所は $dis \cdot fis \cdot h$ の和音であり, K 版と S 版もこの記譜に従っている。

第 III 楽章

T.29の上声に, P 版はターンを示しているが, HU と WU ではみられない。S 版は原典版の記譜に従っている。一方, K 版は P 版のようにターンを示している。

T.62では, P 版は, 上声の第 2 拍目に dis^2 音, また, 下声に dis^1 音を示している。しかし, これらの音は, HU と WU では d^2 音, d^1 音であり, K 版と S 版もこの記譜に従っている。

T.72の上声, 第 2 拍目では, P 版は fis^2 音を符点 8 分音符に, また, h^2 音を 16 分音符としている。しかし, HU と WU によると, どちらも 8 分音符であり, K 版と S 版もこの記譜に従っている。

T.81の上声, 第 1 拍目を, P 版は $fis^2-gis^2-fis^2-gis^2$ の音型で示している。しかし, HU と WU によると, この音型は $fisis^2-gis^2-fisis^2-gis^2$ であり, K 版と S 版もこの記譜に従っている。

T.85と T.87の上声, 第 2 拍目 a^2-d^2 音を, P 版はスラーで結んでいるが, HU と WU では, このスラーは示されておらず, それぞれの音符上にスタッカートが付けられている。K 版と S 版も原典版の記譜に従って, スタッカートを示している。

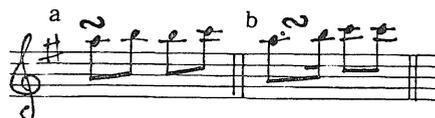
T.109の上声に, HU, WU, K 版, および S 版はターンを示している。しかし, P 版はこのターンを示して

いない。

T.112の上声, 第 1 拍目 g^2 音に付けられている前打音を, P 版は fis^2 音としている。しかし, この前打音は, HU, WU, K 版, および S 版では a^2 音である。

T.119の上声では, P 版は, 譜例 19a のようにターンを冒頭の a^2 音上に示し, 音型を $a^2-h^2-h^2-c^3$ としている。S 版は, HU に従って, 譜例 19b のようにターンを a^2 音と h^2 音の間に示して, 音型を $a^2-h^2-c^3-c^3$ とし, さらに, 第 1 拍目を符点のリズムにしている。K 版と WU の音型とリズムは, HU と同じであるが, ターンは P 版のように a^2 音上に示されている。

譜例 19



7. おわりに

以上, 本稿は, 『ソナタ・アルバム, 第 1 巻』に収められている Haydn の作品を対象に, それぞれの楽譜間にみられる記譜上の相異について, 検討を進めてきた。

まず, P 版においては, 音符, アーティキュレーション, 装飾音, リズムなどに問題点が認められた。音符に関わる問題としては, 位置や長さの誤り, 脱落, および校訂者の付加である。アーティキュレーションの問題としては, スラー, スタッカートなどの位置の誤りや脱落である。装飾音については, 記号自体の誤りのほかに, 位置の誤り, 脱落, 校訂者の付加, 奏法指示などである。そして, リズムについては, 音符の長さの誤りと関連して, 変更されている点である。このように, P 版には多種多様の記譜上の問題点が存在しており, 学習者に与える影響は大きい。作曲者の意図した姿 (楽譜自体は不完全な指示力しかもたないが) から離れることになる。したがって, P 版あるいは P 版に依拠している楽譜を使用する場合には, 音符や諸記号の信頼性に関して, 十分に検討しなくてはならない。

K 版においては, P 版の問題点はかなり改善されている。しかし, 一部の音符と装飾音については, P 版と同様の問題がみられた。それらの中で, 前打音に関わる問題としては, 奏法が脚註としてではなく, 楽譜の中に実音符で示されている点である。奏法の理解のためには, 脚註で明示する方が, むしろ効果的である。また, アー

ティキレーションと強弱記号については、K版自体の問題点が認められた。それは、冒頭の強弱指示、スラーやスタッカートは補足が少ないため、演奏に際して困難が生じるということである。『ソナチネ・アルバム』終了程度の学習者にとっては、校訂者による細かな指示のある方が便利である。

S版においては、P版の問題点は解消されている。校訂者の補足は、細かく指示されているために、この版は、学習者にとって扱いやすい楽譜ということが出来る。しかし、学習者自身の工夫による楽想表現という点からみれば、この細かな配慮が、逆に煩わしいものとなる場合も考えられる。このように、K版とS版には、それぞれ相反する性格を見出すことができる。したがって、教師は、学習者の能力を見極め、適合した楽譜を選択して指示しなければならない。

註

1) T.=Takt 例：T.1=第1小節目

2) C. P. E. Bach：東川清一訳、『正しいピアノ奏法、

上巻』、全音楽譜出版社、112、1963（原著は、*Versuch über die wahre Art zu spielen*, 1753）

3) Heinrich Schenker：野呂愛子・為本章子共訳、『古典ピアノ、装飾音楽法』、音楽之友社、32、1979（原著は、*Ein Beitrag zur Ornamentik*, 1908）

4) J. Haydn：*Sämtliche Klaviersonaten*, Christa Landon 校訂、音楽之友社、Ⅷ

5) 同上書、Ⅷ

6) C. P. E. Bach：前掲書、67

7) J. J. Quantz：荒川恒子訳『フルート奏法』、全音楽譜出版社、83、1976（原著は、*Versuch einer Anweisung die flüte traversière zu spielen*, 1752）

8) ピアノ・ソナタ集は、Karl Päsler の校訂によって、1918年、Breitkopf & Härtel 社から出版された。

9) Christa Landon：*Haydn, Sämtliche Klaviersonaten Kritische Anmerkungen*, Schott/Universal, 80-81, 1982

10) 同上書、82